

(15) 倉谷宿

倉谷宿は、大内宿から二里二町(約九廻)の行程にあり、ここから三二町(約三・五廻)で榎原宿に継ぎました。この後、榎原宿は大川の「長野の渡し」を利用して田島宿に継ぎましたが、大川は大雨時には水かさを増し、渡しが行われなかったため、しばしば駅荷が足止めとなることがあった。このため倉谷宿(水抜村)には入らず、西の折れて、戸石から赤土峠を越えて田島に至る裏街道が利用されました。村の西には「右 若松、柳津海道 左 戸石から□みち」と彫られた宝暦二年(一七五二)の道標が建っています。

倉谷宿はこの分岐点に位置する宿であったため、この地域の中心的な役割を果たした村でもあります。

貞享二年(一六八五)「榎原郷地下風俗覚書」によると、倉谷・水抜村では、寛永(一六二四〜)の頃から米市が立てられ、この市は月に六回立つたことから「六斎市」と呼ばれました。この時期、若松、坂下、高田、本郷、倉谷、田島と六斎市が立っていますから、一定区域内ではほぼ毎日のように市は開かれていたことになります。

近年においては住宅の改築が進み、宿駅時代の町並み景観は徐々に失われてきましたが、茅葺屋根建物や屋敷地の石組、あるいは井戸などが往時の面影を色濃く残しています。

